

2007年度

06号

学術の新しい風

～見えないものを見るために～

New Research
Initiatives
in Humanities
and Social
Sciences

人社プロ

独立行政法人
日本学術振興会

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業

New Research Initiatives in Humanities and Social Sciences

人社プロ・ニュースレター

シンポジウム「人生を楽しくデザインしよう！」
特集

人文社会科学振興プロジェクトの最後を飾る企画として公開シンポジウム「人生を楽しくデザインしよう！ 一個人が拓く社会のかたち」が、3月8日（土）、東京都千代田区（会場：ベルサール九段）にて行われた。

この企画の趣旨は以下の通りである。

現代社会における諸問題に取り組むには、個人にとっても社会にとっても新しい価値観や新しい制度が必要とされている。新しいものを生み出すためには、私たちの現在の価値観や制度を時間的かつ空間的に相対化することが重要であろう。本シンポジウムでは、「家族」「学びと仕事」「世界とつながる生活」等の人生や生活をめぐる3つの契機を取り上げ、個人にとっていかなる選択肢がありうるかを既存の観念にとらわれることなく幅広く提示する。そうした個人の選択と社会制度との相関関係をはっきりと知ることによって、社会を創る当事者としての意識を獲得することができるに違いない。

http://www.jsps.go.jp/jinsha/01_sympo_h200308.html

300人の定員で埋め尽くされた会場では、各プロジェクトの代表者による活動報告と、活発な議論がなされた。その様子を誌上で紹介してみたい。なお、今回の記事は編集子による取材の形をとっており、発表者の校閲は得ていないことに留意されたい。

シンポジウム「人生を楽しくデザインしよう！」
冒頭の挨拶

城山 英明 東京大学教授

この人文社会科学振興プロジェクトでは5年間にわたって様々な分野が協働して分野横断的研究を進め、社会提言や実践をしてきた。そのなかで、常に面白い新しいことを見つけようとしてきた。その一環として、横断的な議論を行うために、プロジェクトや領域を越えたシンポジウムも行ってきた。これまでに、医療、平和構築、市民社会や生命観などを扱ってきた。プロジェクトを構成した5つの領域が集まるのは今回が最後であり、成果としてのシリーズ本も刊行されつつあるので、今回は広がりのあるテーマを設定した。社会提言をする上では、制度から考える方法と価値観から考える方法の2つのやり方がある。社会制度をどのように設計するかという議論は大事であるが、その背景にある価値観の問題を抜きに制度設計ができない、ということが私たちがプロジェクトで得た一つの到達点であった。今回のシンポジウムでは、家族・仕事・世界という3つのレベルにおける人間の生活において、どのような幅を持ちえるのか、そして、それを支えるためにどのような制度設計が必要なのか、ということを考える。現場の日々の暮らしにどのように選択肢があるのか、ということ考えた上で、社会の未来像を探りたい。

おことわり

特集のため通常の巻頭言を最終ページにしました。



シンポジウム第1セッション【家族】

司会：小長谷有紀（国立民族学博物館 教授）

少子化と家族の変化

津谷 典子 慶應義塾大学教授

日本の「少子化」は、先進諸国で70年代から見られた現象である。これについては女性の社会進出、経済発展や社会構造の変化といった背景から、結婚・出産・子育てにまつわる女性の機会コストが高くなったという説明が出来る。しかし、先進国全体では、女性の社会的地位と出生率の相関関係は1980年代半ばに逆転した。その背景には、家庭内の男性役割の増加（家庭内ジェンダーの変化）および女性の雇用の柔軟性の上昇（雇用・制度環境の整備）などがあると考えられる。一方、わが国ではまだ、仕事と家庭（結婚・出産・子育て）の二者択一を女性に迫っている。この背景には家族主義の伝統と、個人のライフコースのせめぎあいがある。対応策として、第1にパートナーシップ関係の柔軟化、第2に政策支援・雇用制度の柔軟化、第3に地域社会のサポートなどが考えられる。



グローバル・ハウスホールディングの時代

遠藤 乾 北海道大学 教授

家庭内のケアに発展途上国（たとえばフィリピン、インドネシア）の女性が労働者として入ってくるという現象がグローバル・ハウスホールディングである。男女が平等にシャドウワークを分かち合えばいい、あるいは、介護などのヘビーなケアは国家が担えという理想はなかなか実現しない。労働力輸出側の背景もある。NIES 諸国では全体で50万人以上の発展途上国の人がNIES 諸国の家庭内で働いている。フィリピンでは、GDPの10%程が海外からの送金である。このような労働力の輸出側・輸入側の利害もあって、日本はフィリピン・インドネシアと看護師・介護士などの受け入れの協定を結んだ。今後、アジア諸国の人が、家庭に入ってくれば、宗教の問題や文化・言語の問題、差別の問題が起こってくる可能性が予想される。



近くて遠い、でも近い家族の仲—原初的ケアと社会的ケアの狭間で

清水 哲郎 東京大学教授

医療現場で医療者と患者・家族が向き合って医療を進めていくときに、どのようなケアのプロセス、どのような意思決定が可能なのか、ということを考えてきた。医療・介護の現場で生じる問題の一つに、家族内人間関係（うちの人）と家族外の人間関係（よその人）が併存し、交叉することに由来するタイプのものがある。例えば、重篤な病を患者本人には知らせないようにと家族が強くと主張するために、医療者は真実を説明できず、患者が誤った現状認識の下で進む途を選ぶのを手をこまねいてみている、という場面だ。ここでは親密圏と公共圏が重なっている。社会化されたケアは他人同士のものなのか、というとそうでもない。親密圏の倫理が医療者と患者の関係にも現れてくるのである。つまり、職業的親密圏における医療倫理を構築する必要がある。



多元化する社会の中の家族

宇田川 妙子 国立民族学博物館 准教授

先進諸国で見られる家族形態の多様化は、必然的に家族の意味変化を伴う。イタリアは日本と同様に少子化や晩婚化が進んでおり、また家族への関心・愛着が非常に強い社会だが、親子以外の親族や非親族（現在では移民）が高齢者のケアにあたることが多く、様々な市民組織、NPO が少子化・高齢化、ならびに女性進出のサポートの支援などを行っている。イタリアでは、家庭に狭義の家族以外の人が入ってきやすい背景があると言える。これは、「家族は重要だが、各個人にとって全部ではない」ことも意味する。家族が常に外部の人に開かれているがゆえに家族の枠組みが柔軟になり、関係が多元化することによって各個人は家族の拘束から解放される。が同時に、家族の「家族らしさ」も差異化され強調されることになり、彼らはけっして家族を手放さない。このような開放的な家族像は日本の家族を相対化する上で参考になる。



食事をする空間と家族

村松 伸 東京大学准教授

2LDKのD（ダイニング）に設置されたテーブルで、家族仲睦まじく、栄養豊富な食事を取ることは幻想に近い。コンビニ弁当をひとりで食べる、ファーストフードに依存する、電車の中での食事など、確かに「疲弊した食事」と言えるかもしれない。理想像のような家というのは、どこか幻想なのかもしれない。現実むしろ都市にこそある。一般的に、家庭生活は、外部化しており、都市が人間を疎外化しているといわれている。しかし、都市は人間を疎外するものではない。都市は、私たちに生きるための利便性と生きる方略を与えてくれる。私たちの成果の一つに、都市を使い倒す＝アーバン・リテラシー（都市と共生する力を学ぶこと）というのがある。このアーバン・リテラシーとは、異なった状態、異なった価値観、特殊性を生き抜くということである。



モーツァルト・オペラと恋愛結婚の成立

岡田 暁生 京都大学 准教授

愛に基づく結婚というのは近代現象にすぎない。モーツァルトが活躍した一八世紀後半は、欧州の思想界で「恋愛」とか「結婚」とか「家族」などの概念について、極めてラディカルな論争が繰り広げられていた。恋愛と結婚を混同することが恥ずかしいと思われていた。その時代の結婚とは、神の前で取り交わした契約であり、また家と家との経済的利害に基づく関係であって、夫婦には子ども（財産の相続人）を作る以外の義務はなかった。モーツァルトのオペラに不倫や身分違いの恋の話が出てくるのは、神の地位が低下して、結婚の意義が失われている時代の産物であり、その苦闘の結果、恋愛に基づく結婚というイデオロギーが生まれるのである。近代が揺らいでいるのだから、家族も結婚も揺らいでいくのはある意味で当然ではないか。



シンポジウム第2セッション【学びと仕事】

司会：青島矢一（一橋大学 准教授）

高等教育と教養

葛西 康德 大妻女子大学 教授

1991年の大学設置基準の「大綱化」が行なわれて以来、大学の「教養教育」は、その方法、内容、そしてシステム、いずれも多様化した。その背景には旧教養教育が不評であったことが一因としてあげられる。これは、産業界・経済界の規制緩和と時期を同じくしたものである。その結果、経済界では成功したのかもしれないが、大学教育では、この規制緩和が成功したとは言えない。第1に、旧教養科目が失敗だったという認識が間違っていた。第2に、産業界の人が大学教育に入ってきたが、その逆はあまり起こらず、教育の枠があいまいになった。教育の「規制緩和」は、実は初等・中等教育、大学院教育など、大学学士課程を取り巻くあらゆる領域で実施された。その結果、各教育機関の「守備範囲」は不明確になり、教育機関の「相互不信」が蔓延した。今、教養教育に求められているのは、それぞれの領域の輪郭を示すべきではないだろうか。その最低限の型については、規制緩和をすべきではないのかもしれない。



学びと仕事の繋ぎ

苧谷 剛彦 東京大学教授

「失われた10年」に日本の教育システムでは何が成功し何が失敗したのか。改革が必要だと言われるときは何か問題があり、放置すると問題になるからであり、その解決手段として改革がある。医療だと診断と処方。日本の教育に問題があるとしたら、正しい診断がなされたのか、処方がなされたのか。失われた10年をめぐる状況は、やや性急に、あせった診断をしてしまったのかもしれない。21世紀にはこれまでと異なる能力が必要とされるという言説があった。グローバル時代に対処できる人材を育成しないとイケないという声もあった。しかし、企業社会から本当にそういう声があがったのかという検証が無い。ここ十数年は小学校から大学まで体験主義的な考え方が日本の教育界をリードしてきた。他の先生や企業との議論を行って深めていくべきだ。



仕事の現場

加登 豊 神戸大学 教授

もともと企業が大学卒業生に求めていたのは、素直に育って、ロジカルに考えられて、ヘンな癖がついていない人。しかし、企業内教育研修の予算が「不要不急だから」削減され、また、技術をもったベテランが解雇されるという状況の中、日本企業の生命線である品質が維持されなくなってきた。企業は、大学に即戦力生産を求めた。企業が人材に求める能力は1 情報収集力と情報分析力、2 問題発見能力と問題解決能力、3 素直に学ぶ謙虚さ（ベンチマーキング能力）などである。しかし、たとえば情報収集能力について、初等教育から高等教育に至るまで、情報収集についての教育がほとんどない。学生は、情報源としてインターネットに依存しているし、企業人もインターネット無しでは仕事できない現状は変えていく必要がある。



職業としての芸術

吉岡 洋 京都大学 教授

芸術には技能という側面があり、その点は意義を説明しやすい。たとえば芸大の卒業制作展を観にきた父兄は、日本画や工芸の作品を見るとそれなりの技能が身についたと納得する。だが現代美術のコンセプチュアルな作品などでは、4年間学費払ってきてコレか！と文句を言うような親も出てきた。このことに限らず、今の時代は何事に対しても手っ取り早い説明を求めるようになった。だが芸術の存在理由とは、この世界が原理的に説明不可能であるという点にある。明示的に説明できないものを認める心の余裕が人々になれば、芸術など端的に無意味である。さてこの十数年間における大学改革を見てくると、アカデミズムに過剰な権威を認める旧弊な体質が壊れたという点では小気味いい面もある。だが芸術や人文科学分野にかんして言えば、大学改革が失敗であることは明白である。それは芸術と人文科学を単なる制度として残存させる反面、その精神を大学から放逐する結果になった。これは文化全体にとって危機的な事態である。



個人における就職の意味

佐藤達哉 立命館大学教授

成果主義の一つの問題は、失敗することを包容できないことではないか。成果を出すのは個人である。成果主義にはわかりやすいモデルがあるのに、失敗したときにどうするのか、についてはモデルがないから、自分が全否定されたと思って落ち込む。多くの人は、失敗はいけない、失敗を隠さなきゃいけないと思っている。また、世間も失敗した人を「あいつは負け犬だ！」と後ろ指をさすのではなく、失敗を許すようであるべきだろう。たとえば、法科大学院では、半分は法曹職に就けない現実がある。それにもかかわらず教育機関が個人の人生の目標の幅を広げないでいるのは問題であり、多くの人は萎縮している。社会の側でも、多額の税金をかけて教育した人材を、使い倒すくらいの気迫と優しさが必要なのである。車を通らない道路は壊せばいいが、人材は活かしてこそ花である。個人の意味を多様にするために人生の複線径路モデルをこの機会に提唱したい。



編集後記

ニューズレター、第6号を無事出せました。人社プロのネットワークがさらに広がっていくことを祈っています。第5領域のみあと1年残ります。ニューズレターはその盛り上がりもおいかけていきます（編集長 s）。

早いもので第1号が出てからもう1年が経過しました。ニューズレターでは様々な勉強をさせていただく機会が得られ、自身の成長につながったと実感しています。これからもよろしくお願いいたします！（編集見習い h）

健康診断で、血圧、血糖値、コレステロール値が低いと指摘されて以来、意識して揚げ物や卵類を食べること1年。上がったのは体脂肪率だけでした。太らずに値を上げる方法はないでしょうか？（事務局 n）

このプロジェクトの立ち上げのために人事異動し、2年ぶりに担当に返り咲いたのもつかの間で、またも異動することになりました。私自身も本プロジェクトで大いに勉強させていただきました。研究者の先生方には感謝しております。また、いつかどこかで・・・（事務局 k）

シンポジウムの
紹介はまだまだ
続くよ！



シンポジウム第3セッション【世界とつながる生活】

司会：佐藤 仁（東京大学 准教授）

楽しみ、口コミ、踏み出し

蔵治光一郎 東京大学 講師

生活と世界とのつながりを「衣食住」で考えると、その殆どが輸入品であり、すでに世界とつながっている。だが江戸時代は殆どが国産だった。自然環境には大きな枠組みとして地球環境があり、身近なもので衣食住がある。そしてそれらの中間に地域環境がある。現代の私たちは地域環境への関心が希薄だ。かつては、身近な森であれば燃料、川や海岸であれば食材の調達など、人の手が入ることで環境が健全に保たれていた。しかし現在では、河川をめぐる防災上の問題や食の安全、住宅にしても薬剤による健康への影響など、安心は失われている。この背景には、明治期に作られた地域の自然環境をめぐる縦割り型の制度や学問分野が現代にそぐわなくなっていることがある。制度を抜本的に変えるのは容易ではないが、人々が既存の制度的枠組みを超えてつながっていくことを我々は「踏み出し」と称している。行政、研究者、市民が踏み出すことにより、暫定的にでも地域の自然環境の致命的な劣化は避けられるのではないか。



他人事ではない世界の紛争

黒木 英充 東京外国語大学 教授

中東は問題に満ちた地域であり、人間の安全保障が守られていない。だが、日本のエネルギー資源の8割以上が中東から来ているし依存度は高まる一方だ。レバノンの中東の縮図である。人口300万前後だが在外レバノン人が1200万人いるという。親戚などが世界中にいる家族が多い。格差社会でもある。政治的にはアメリカ派とイラン派に分かれるだけでなく、様々な大国の思惑が小国を翻弄している。世界を見る際に、誰もが実際に行けるわけでもない。生活の上に世界政治が動いているということを考えていくことが大事で、その際には言葉をただ単純な言葉として理解してはいけない。私たちは「テロ」という言葉一つですべてがわかった気になっていて、実際にはなぜその暴力が生まれてきたのか、何もわかっていないのではないだろうか。



翻訳を通じてつながる世界文学と日本

沼野 充義 東京大学 教授

明治以来、日本は西洋のものを受け入れるため様々なものを翻訳してきた。今では『カラマーズフの兄弟』など、古典新訳が売れている。翻訳は場所や時間を越えて、わが国のもののように作品を読むことができ、日本語文学の財産となる。数字で言うと日本で2004年に出版された書籍56000点のうち約4900点は翻訳書である。これは海外と比べても高い水準にある。大学教育では翻訳は二次的に扱われることが多いが、多くの人にとって翻訳文学は本質的なものではないか。一方で、英語からの翻訳のみが増えているなら問題である。確かに英語は事実上の世界共通語になっており、マイナーな言語の修練は難しい。しかし、日本が翻訳でつながっているという点に注目すると、世界の多様性を理解するために様々な文学、文化とつながる回路を保っておくことは重要である。手間はかかるが豊かなことを目指したい。



食の選択とライフスタイル・経済システム・学問と協働の世界

平川 秀幸 大阪大学 准教授

餃子で象徴されるように、食品安全の問題は非常にホットなトピック。この10年で BSE（牛海綿状脳症）や違法残留農薬、遺伝子組み換え食品、偽装表示などが問題になった。その背景には、海外からの食品輸入の問題がある。カロリーエネルギーベースで70%が海外から輸入されている。また、外食・中食（なかしょく）という形で食の商品が多様化したため、コストパフォーマンスを考えると、輸入依存にならざるをえない。経済システムの問題だけではなくエネルギー問題、環境問題とも関係している。穀物100gからとれるのと同じ量のカロリーを牛肉でとろうとすると、その牛一頭を飼うために、体重の11倍の飼料が必要。そして飼料作りのためには森林伐採開発が行われているという負の連鎖サイクルがある。しかし、食の研究は、チャレンジングであるがゆえに、他の分野と協働しなければいけないがために、自分の殻にとどまってはられない。踏みだしであるし出会い系である。だから自分の専門も広がるし変わっていく。



金融と投資家・消費者

松井 智予 東北大学 准教授

家計の資産が産業へ流れる経路は、従来、銀行が預金を企業に貸し付ける間接金融と投資家が株式や債券を買う直接金融に分けられてきた。戦後の社会は、資本の国際移動を制限した20世紀の流れを汲んでおり、金融サービスを消費する消費者は、基本的には日本の企業の株式の購入と、日本の銀行への預金という選択肢のなかでものを考えていた。デリバティブなどは全く新しい形の金融商品であり、誰も想像がつかなかったものである。日本においても自分の資産の運用を世界というコンテキストで考える必要がある。しかし、日本の家計は一般に投資に対して消極的であり、モチベーションがある人に機会を与えるという仕組みだけではなく、金融教育のような介入的なやり方でより多くの人に意義を考えてもらう必要もある。



総合討論

司会：桑子敏雄（東京工業大学 教授）

総合討論は、各セッションの司会者などを中心に、シンポジウムのまとめだけではなく、人文社会科学振興プロジェクトのあり方自体を振り返るという目的で行われた。

会場からの質問を受け付ける時間もあり、医学関係との連携がさらに必要ではないか、人文社会科学の多様化は逆に当事者意識の低下を招くのではないか、社会に役立つ人材を輩出するためにはプロフェSSIONALではなくジェネラリストの教育が必要なのでは、など様々な意見が寄せられた。ものの見方の多様性を示すだけでなく、社会と問題意識を共有していくことの大切さがこのようなやりとりの中で再確認された。

人文社会科学の可能性と面白さは、社会とのつながり無しにはありえず、そこには多様な「人生」と「デザイン」が存在することを一つの結節点として、本会は締めくくられた。



迷子、家出、あるいは寄り道



小長谷 有紀

所属：国立民族学博物館 研究戦略センター 教授
 専攻：文化人類学、人文地理学
 著書：『モンゴルの二十世紀』など

私の職場は、大学のように授業がない代わりに、博物館で広く社会に向けて研究成果を発信している。来館者と私たち研究者との関係は、大学での学生と先生の関係と、似ているようでかなり異なる。来館者は、学生のように先生から単位をもらうわけではないから、そのクレームはまことに手厳しい。毎日クレームが累積していく連絡ノートをほぼ毎日のように読んで、律儀な同僚がいる。彼によれば「迷子になるというクレームが多い」そうだ。だから、迷子にならないように展示方法を工夫しなければならないとのこと。なるほど。でも、本当だろうか。迷子になるというクレームが多いこと、実際に迷子になるケースが多いこと、それらを事実認定するとしても、本当に、だから迷子にさせないようにすべきなのだろうか。

幼い頃からよく家出をしてきた私は、現在、ときどき、すこし迷子になるまで散歩する。家を出て（これはふつう家出とは言わないですね）、適当にあちこち歩き回り、ちょっとわからなくなるまで歩いて、なんとか家に戻る。このときの喪失感というのは、歩くという爽快感とともに、なかなか心地よい。だから、少しばかりの迷子なら、してもよいのではないかと思う。命の危険があるわけなし、しょせん展示場の中なのだから。むしろ、今日は1日迷子になろう！そんなつもりで、ゆっくりと未知の時空を楽しんだり、既知でも異なる出会いをしたり、そんなふうを楽しんでもらいたい。ものごとの探求において、夢中になるあまりに、しばらく自分の位置を見失うのが迷子なら、それはむしろ大切なことではないだろうか。

意図的な迷子は、家出の代替になるかもしれない。少なくとも現在の私にとっては、そんな感じがしている。家出好きが高じてフィールドワーカーになったのだと、つい最近までそのように自覚していた。しかし、家出がもたらす閉塞感からの解放は、同じ場所に出かけたり、異なる場所で同じことを調べたりすることからは得られない。研究者にとって家出とは、一つの学問領域に収まりきれず、新しい学問領域へ出かけることではなかったか。戻らない覚悟をして出て行く人もいるだろうし、大いに迷って戻ってしまう人もいるだろう。戻って来た時点から見れば、家出はしょせん寄り道に過ぎなかったのかもしれない。けれども、そのさりげない果敢によってこそ、昨日まで見えなかったものが見えるようになるのではないだろうか。

◎ 目次

シンポジウム「人生を楽しくデザインしよう！」特集／冒頭の挨拶	1
シンポジウム第1セッション【家族】	2・3
シンポジウム第2セッション【学びと仕事】／編集後記	4・5
シンポジウム第3セッション【世界とつながる生活】	6・7
巻頭エッセイ	8

○編集：「学術の新しい風」編集委員会
 編集長：サトウタツヤ（立命館大学・教授）
 第3領域の「ボトムアップ人間関係論の構築」
 グループリーダー
 編集担当：日高友郎（立命館大学・学生）
 デザイン：三村豊（東京大学生産技術研究所・学生）
 事務局：坂野、小笠原（日本学術振興会研究事業課企画係）

○発行：独立行政法人 日本学術振興会
 研究事業部研究事業課
 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業担当
 住所：〒102-8472 東京都千代田区一番町8（FSビル7階）
 電話：03-3263-4645
 Email：jinsha@jsps.go.jp
 http://www.jsps.go.jp/jinsha/
 ○印刷：株式会社 創造社